

# 一期一会のはずだった…

嘉 数 勝 美

もう14年も前のことになる。2004年5月29日(土)、<高知市文化プラザかるぼーと>で開催された「第45回外国人による日本語弁論大会」で、事務方の取り仕切りをしていた私は、その日の副審査委員長だった奥村教授と初めて出会った。そして大会が終われば、それぞれの日常にもどり、よほどのことがない限り、互いの人生で二度と出会うことはなかったはずだった。ところが、何がどうなったのか記憶が定かではないのだが、教授との会話が終わる頃までには私はすっかり誑<sup>たら</sup>されていて、はたしてその夏の人文学部での集中講義を引き受けてしまっていた。教授からすれば、誑すとは聞き捨てならぬ言い掛かりだろうが、当時まだ大学での本格的な教授経験もない私をその気にさせてしまったのだから、文字どおり教授の巧みな言<sup>ことば</sup>に狂わされてしまったといっても言い過ぎではない。その年以降、私の高知大学での集中講義は回を重ね、途中の海外勤務による不在期間を除き都合12回にもなり、いまこうして教授の退職に際して歓送の一文を寄せているのだから、この人の「人誑し」たるや凄いものだと思改めて感嘆している。私の中での教授は、まもなく「オクムラセンセ」と親しみを込めて呼ぶ存在になっていった。なにせ教授の教え子や同僚からも同じような響きを感じ取れたほどであるから、かねて彼らもいつのまにか誑されていたのだろう。むろんいずれの場合も、その人柄に魅了されたという意味からであることは、しかと読み取っていただきたい。

この「オクムラセンセ」との出会いがなければ、おそらく私は、凡庸な一事務屋として定年を迎えていたはずである。傍目には華やかな国際文化交流という本業の中でさえ、自らはひたすら地味な裏方に徹しなければならなかったし、また、かつて学究をめざすものの頓挫してもいたからである。そのような私の中で、高知大での講義を重ねるうちに、冷めかけていた学究への思いが再び沸き立ち、ついに2007年には在職のまま大学院再入学を果たし、その3年後には博論を書き上げることができたのである。なによりもそれが、私が自ら人生のシナリオを書き換えるきっかけとなったことは間違いない。それからというもの、業務上はもちろん、研究・教育上でもさまざまな活動の場を得て、さらに定年後には、台湾・国立政治大学で初めて専任教授としての任に就いたり、帰国後も複数の大学・大学院での授業を担当したり、書き換えられたシナリオからいろいろなドラマが展開していった。あの日奥村教授に誑し込まれていなければ、いまとは真逆に、それこそ凡庸な生活に鬱勃としていたはずである。

とはいえ、実のところ「オクムラセンセ」と私とは、喩えて言えば、七夕祭りのように年に一度しか会っていないのである。それでいて再会するやいなや、他愛ない地口合戦を昨夜からの続きのように繰り返してしまうほど、傍目にはすでに長年の相方同士にしか映らないほどの関係なのである。彼といると、ふだんは標準語遣いの私も、いつのまにか関西出自の言語モードが再起動して、

またかつて琵琶湖の水に親しんだ同じ子河童として、しかしその頃はどこかですれ違っていた時空を取り戻そうと必死になるのは、やはり彼のもつ見栄も飾り気もない、少年のように屈託のない人柄に、また懲りずに誑されてしまっているからなのだ、と半ば諦めている。

さてこれだけでは、好ましい人物とはいえず、「オクムラせんせ」の人誑しぶりばかりを際立たせてしまう虞があるので、実は自分自身の内面と向き合うこと、とりわけ芸術家としての才知にも長けていることも付言しておかねばなるまい。知る人ぞ知るところだが、教授の画力は幾度も授賞されるほど秀でていて、また滋賀の実家近くでは、それこそ土塊<sup>つちくれ</sup>までも誑すかのように、自らの美的感性で練り上げた「信楽」を焼いているという。残念ながら、私たちの出会いが七夕モードに設定されているため、私自身はまだその多才ぶりを目撃したことはなく、いずれそのうちの楽しみにとってある。一方、芸術家の気質には熱中と偏執が相まっていることが往々見受けられるが、どうやら教授にもその一面があるようだ。私の限られた経験からに過ぎないが、たとえば、車についての拘りを挙げておきたい。というのも、この十数年、私の高知滞在の都度に供してくれた彼の車が、一度として同じであったためしがないからである。これほどまでに頻繁に車を乗り換えるのは、いったいどういう訳からなのか、いまだに明解な理由を聞かせてもらっていない。ただの移り気だとか、新しもの好きだとか、いろいろと意地悪く勘繰ることはできるが、どうやら「オクムラせんせ」の場合は、芸術家肌<sup>びんがし</sup>に由来する熱中か偏執かが無意識に車という対象にも向かっているのでは、と好意的に考えることにしてきた。もしもとんでもない勘違いだったら、今度こそはその真相を聞かせてほしいものだ。

つまり奥村教授は、人に対してもモノに対しても、むろん仕事に対しても、あるがままの感性と才能を遺憾なく発揮してきた愛すべき人物なのだ、というのが私からの中間評である。中間と断るのは、教授が高知大を去ってしまえば、私が毎年高知に行く唯一の理由と、励みや楽しみもなくなってしまうので、仕方がないが、一旦はここで区切りを打たねばならないからである。しかし、それこそが私たちにとって次の新しい関係の始まりとなるだろうし、まだこれからも「オクムラせんせ」と私の相方道中は長かろうという確信からでもある。あのとき一期一会と思っていた私たちの出会いは、どうやら多生の縁が結んでくれたものだったようだ。ありがたい。

(かかず・かつみ：元国際交流基金東南アジア総局長・参与、元台湾国立政治大学外国語文學院専任客座教授)